

# 京都の景観まちづくりの課題と今後の展望を考える

## 1 目的・概要

本プロジェクトでは、1年を通じて京都市の北部に位置する松ヶ崎地域について学び、課題を洗い出し、まちづくりの展望を見出すためのアプローチを考えました。この松ヶ崎地域とは、平安京遷都の際に平城京から移住してきた農家百軒に起源があると言われており、五山の送り火の1つである妙法の送り火や題目踊りと言った地域固有の文化が成立してきた、歴史ある地域です。



しかし、現在の松ヶ崎には妙法や題目踊りといった地域固有の文化を継承する担い手が不足しているという課題があります。私たちはこの課題について、松ヶ崎地域に昔から住んでいた住民と新たに移住してきた住民との間に交流を生み出すことが、解決の糸口に繋がるのではないかと考え、住民同士の交流を生むためにはどうすれば良いのかを模索し続けました。実際に松ヶ崎地域へ行き、自治連合会の会長や地域運営に携わっている住民の方々にヒアリング調査を実施しました。また新たに松ヶ崎に移住してきた住民の方々に意見を伺い、視野を広げた上でよりよい交流の方法を模索しました。そして、それらの調査を踏まえ、住民の交流方法に関する提案を住民の代表者の方々に向けて行いました。

### Annual Schedule

2024年	5月	フィールドワーク
	6月	ゲストスピーカー講演（立正会岩崎会長） 嵐山、祇園新橋のまちづくり協議会を見学
	8月	涌水寺の題目踊り、さし踊りを見学 妙法の送り火点火作業を見学
	10月	ゲストスピーカー講演（新住民の方々）
	11月	zoomでのヒアリング（青森県弘前市の都市計画課）
	12月	藤袴祭り出店、障がいを持った方へインタビュー
	11月	ラジオ番組企画、収録
	12月	立正会館にて地域の方々への提言



## 2 成果達成度

本プロジェクトでは、松ヶ崎の文化や人々の想いを学び、新旧住民が繋がるためにはどうすれば良いかを考えてきました。

春学期は、「松ヶ崎の文化や景観を理解する」ことを目標設定とし、主に3つの活動を行いました。1つ目は、まち歩きです。松ヶ崎を歩いて地域の神社や街並みなどを実際に見ることで、松ヶ崎にある魅力・課題を発見し、地元の方の地域に対する認識との「差」に気づくことを目的としました。2つ目は松ヶ崎市立証会の岩崎会長との対談です。この対談を通して、世帯構成や居住形態の変化によって、地域の住民同士の関係性が希薄化していることを学びました。3つ目は、松ヶ崎と他地域を比較するに当たって嵐山と祇園新橋を対象とし、文化的景観保護、伝統の継承、地元民にとっての嵐山と祇園新橋について、最前線で活動されている方にお話を伺い、私たちは「文化の捉え方」について比較することができるのではないかと考えました。



しかし、春学期には2点の反省があります。1点目は、能動的な姿勢となっていたことです。限られた時間内で、自分たちが何に対して問題意識を持ち、どのような人をターゲットにするかなどの初期段階で躓いてしまいました。また、先生の意見や授業で扱った内容を能動的な姿勢で受けてしまったこともあり、本格的に動くのが遅れてしまいました。2点目は、全体がゴールに向かって同じ方向を向けなかったことです。毎回の授業では一度通して反省点をディスカッションするのが精一杯でした。そのため、全体の方向のすり合わせに十分な時間を割くことができなかつたため、全員が同じ方向を向けない原因となってしまいました。

以上の反省を踏まえて、秋学期では「方向性の統一」と「受動的な活動」を意識しました。そして、目標を「新旧住民の繋がりや伝統文化の継承」と設定し、ヒアリング調査を通して様々な人の声を聞きました。

夏休みから秋学期にかけて、主に3つの活動を行いました。1つ目は、8月に五山送り火と題目踊りの体験です。送り火では地域の人の繋がりや強さを認識でき、新旧住民の交流も見られました。題目踊りでは松ヶ崎立正会の構成員など旧住民が中心となっていることがわかりました。2つ目は、新旧住民の意見を伺い、住民同士の繋がりについて調査しました。新住民側は故郷ではなく住まう環境と捉えていることに対し、旧住民側は価値感を共有するのが難しいと考えていることがわかりました。3つ目は11月下旬に青森県弘前市都市計画課に「レッツウォークお山参詣」について取材を行ったことです。この調査を通して、新旧住民が繋がるための参考となりました。

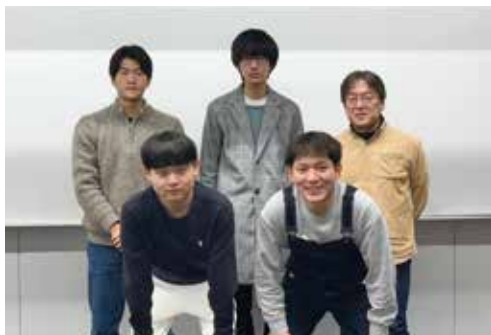
これら3点の活動を通して、私たちは12月下旬に松ヶ崎立正会を訪問し、春学期からの調査を元に、護摩木の配布や住民を対象としたツアー、送り火での防火はんてんの制作などの提案を行いました。松ヶ崎立正会の方々にも私たちの提案に「いいね、面白い提案だね」と興味を持っていただくことができました。また、提案内容についても具体的なフィードバックをいただくことができ、より内容を具体化することができました。この提案と協議の場が得られたことで、1年間の活動が実を結んだと感じ、春学期の反省を十分に活かして結果に導くことができました。



# 3 プロジェクトを通じて

この1年のプロジェクトを通じて3点の資質を養うことができました。

1点目は、自主性です。本プロジェクトでは「京都の景観まちづくり」について「松ヶ崎」を取り上げて考察するというは決まっていたが、詳細な内容についてはメンバーで取り決める必要がありました。授業時間外も使って、話し合いを重ねることで、メンバー間の意見を共有し、成果物を作り上げることができました。また、授業の司会を履修生が分担して行うことで、授業の方針についても考えながら履修することができました。



2点目は、計画性です。限られた時間に成果物を作る必要があり、さらに秋学期にはメンバーが半数以上減ってしまったので、一人あたりの仕事量が増加してしまい、大変苦労しました。そのような中で、メンバーが限られているからこそ、仕事の割り当てや、計画を早く立てることで負担をなるべく少なくし、最後まで活動を続けられました。また、春学期にヒアリングの回数が少なかったという反省を教訓にして、秋学期は多くのヒアリングをすることができ、充実した授業内容を展開することができました。

3点目は、課題の解決能力です。松ヶ崎学区では、すでに様々な取り組みが行われており、新規制を見出すことに苦労しました。そこで、松ヶ崎学区に類似した市町村を調査することで、課題の突破口を見出しました。

本プロジェクトでは、以上の3点の資質を養うことができただけでなく、フィールドワークや地域の方へのヒアリングなど、座学では学ぶことのできない貴重な経験をすることができました。本プロジェクトでの学びを就職活動などに生かしていきたいと思います。



## 編集後記

春学期の当初、私たちは本プロジェクトに対してどのようなアプローチを行うべきなのかという当惑を拭えずにいました。本年度開始のプロジェクトということもあり做すべき前例はなく、景観まちづくりという地域規模の課題に対し、寄せ集めの学生数人に果たして何ができるのかという疑念がありました。プロジェクトとして目指すゴールの輪郭が見え始めたのも、祭事への参加や度々のヒアリングを経た秋学期からではないでしょうか。その間、多くの優秀なメンバーの離脱もありました。

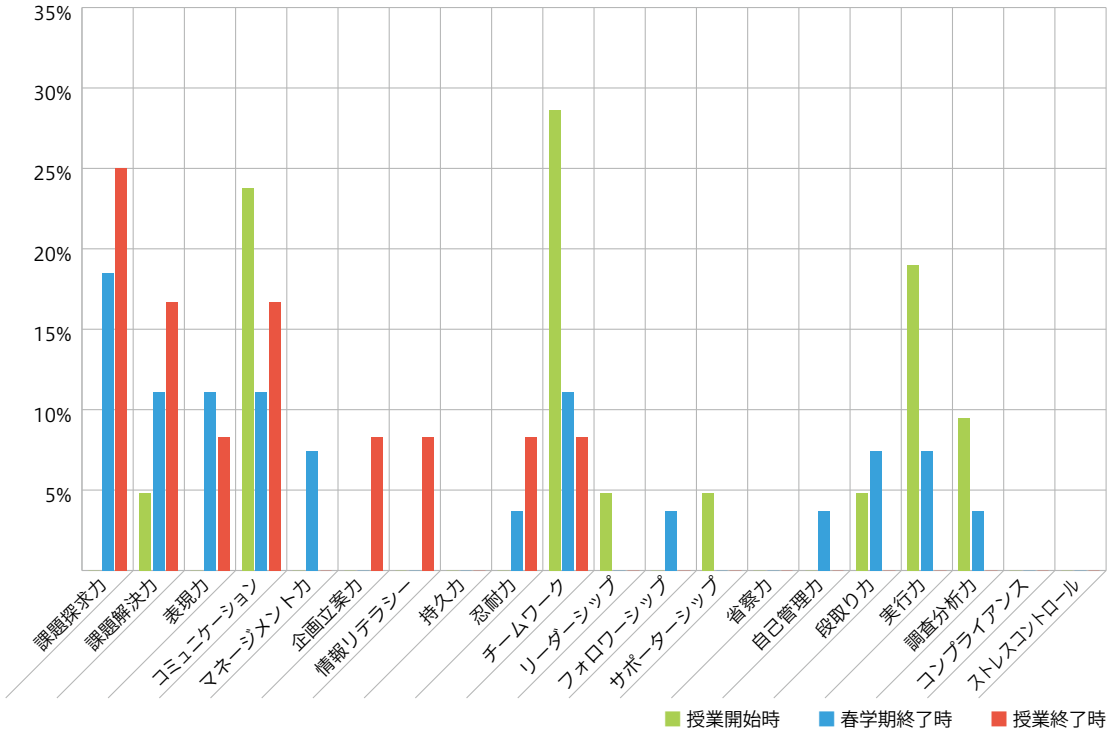
この1年、松ヶ崎の方々からは、多岐にわたる貴重なご教示を賜りました。私共としても、松ヶ崎の方々に何らかの成果を以て還元できればと存じていましたが、力及ばず、それほど多くをもたらすことができた訳ではありません。しかしながら、この一年で見聞した松ヶ崎の文化や、それらを守る方々の取り組みや思いは、確かに私たちの胸に残っております。

## プロジェクトメンバー

森田 雄介(文4) 川本 琢磨(文2) 小野 倫敬(法3) 大石 一輝(社会2)

## プロジェクト活動 アンケート集計結果

Q1. チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んでください。



Q2. プロジェクト活動を通じて実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んでください。

